小型ジェット機による皆既日食観測

大越　治

「これで真東です」３月18日11時21分38秒，パイロットの田中氏の声．我々７人の観測隊を乗せた機は，高度8800ｍを東に向けて飛び始めた．太陽は濃紺の空に糸のように細く，水平線は鮮やかなオレンジ色に染まる．いよいよ皆既日食の始まりだ．

前日の17日，私たちは羽田発の最終便で八丈島に飛び，大阪から来るこの飛行機とはそこで落ち合って乗り込むはずだった．しかし羽田で私を迎えたのは，先の便で出発したはずの妻と，強風のため八丈への便はすべて欠航したとの知らせだった．このままでは苦労して計画した観測が不可能になる．さっそく大阪の田中氏に電話で相談した結果，18日早朝，名古屋空港から出発と決まった．勢ぞろいした７人の観測隊は，新幹線で名古屋に向かったのである．18日の朝，名古屋を飛び立った機は，八丈で給油の後，低気圧による雲の影響を避けて，予定より南に向けて飛んだ．そして今，待ちに待った皆既の時が来たのだ．

今や姿を隠そうとする太陽は，右手真南の空60度．全員，割り当てられた窓にしがみつくように身構える．タイマーによる自動撮影のカメラが，カシャンカシャンとシャッターを切り始めると，暗黒になった空に大きなダイヤモンドリングが輝いた．続いて真珠色に輝くコロナが，東西に２本ずつの長い流線をひいて広がる．

今回，我々７人が初めから機上観測を計画したのには，休暇が取れないというほかに理由があった．条件さえ良ければ地上で見るのが一番だ．しかし空気の散乱のため，ただでさえ弱い外部コロナの光はさらに弱められる．高空では散乱が少ないので，コロナは地上で見るより広がって見えるはずだ．地表を走る月の影が見えるかもしれない．地上と比較して，面白いことがたくさんありそうだ．日食を何度も経験している我々は，一度は空から見たいと思っていた．日本の近くで，しかも地上の条件の悪い今回はチャンスだったのだ．

しかし，目的に合った飛行機を捜すのは困難を極めた．旅客機や小型レシプロ機のチャーターは，性能・費用両面で折り合わず，ようやく株式会社ノエビアの協力で小型ジェット機が使えることになったのは，２月に入ってからのことだった．

そして今，目の前には期待通りの光景があった．地上では濃い青色の空に見られるコロナが，今は暗黒の空に浮かぶ．地上よりずっと鮮やかな，真紅のプロミネンス．黒い月の縁は，まるで歯車のようにくっきりとぎざぎざだ．その両側，東西方向には，銀糸をよりあわせたようなコロナがトンボのはねのように長く伸びる．

我々が口々に叫びながら，狭い機内で必死にコロナを見ているうちに，再びダイヤモンドリング．「わ，太陽が迫ってくる」副パイロットの桜井嬢の声と共に，太陽は急速に元の輝きを取り戻し，皆既は終わった．飛行機が時速 500kmで東向きに飛び，月の影を追いかける形になったため，我々は地上で見るよりも20秒長く，約４分の皆既を経験できたのである．